

敵と彼女と革命爆弾

もゆ

大塚英志は書いている。

よど号や重信の「子供たち」は、あの山岳ベースで産まれなかつた「子供たち」の産まれてしまつた姿であり、彼女らの物語ではなく父母の物語を殆ど運命のようには背負わされている。ああ、雨宮たちと同じじやないかと思う。

その意味で「ルーシーの子供たちの世代」はやはり父殺し、母殺しの物語をいつかは書くべきなのだ、とふと思つたりもした。ぼくは書かないよ。

（『多重人格探偵サイコREAL』徳間デュアル文庫）

ぼくたちは「あの山岳ベースで産まれなかつた」「ルーシーの子供たちの世代」より六歳年下だ。なのにぼくは、大塚英志の悪意がぼくたちに向けられているように錯覚する。ほとんど被害妄想だけど、ぼくは、あの時代の空気に、なしくずし溶けていつた敗北は、ぼくたちの世代の誰かによつてのみ総括されうるのではないかという思いから抜け出せないでいる。

誰から求められたわけでもないけれど。

そんな義理も責任もないけれど。
ぼくたちの世代なんて、どこにも存在しないけれど。

一九七八年九月、滝本竜彦は北海道に産まれた。この国が歴史の終わりを迎えたとき、彼は十歳だった。それはつまり、彼が、あるいは彼と同い年であるぼくやH.R.U.T.が、未来は現在よりマシだと信じることができない社会で十代を過ごさなければならなかつた最初の世代であるということを意味する。

敗北の総括という負債は、成長の神話という雰囲気のなかに隠され、先送りされつづけてきた。ぼくたちよりも六歳年上の「ルーシーの子供たちの世代」には、隠されたものを見らかにすることなく、十代をやり過ごすことが可能だつた。

ぼくたちには許されなかつた。

ぼくたちは十代のなかばに、リバイバルされた『ぼくたちの失敗』を聴いて陰鬱たる気分に陥つた。あらかじめ失敗した世界で、誰の失敗なのかすら忘られた失敗を抱えこまされて、どうして明るい気分でいられただろう。同じ十五歳でも、盗んだバイクで走り出すほど莫迦ではなかつた。『ネガティブハッピー・チーノンーエッヂ』は、走り出してしまつたんだけど、それについてくだくだしい説明

は必要ないだろう。

こうして、明示的な敵なんてもはや存在しないことが判

つてしまつた世界に、ぼくたちは、けれども闘争の渴望とともに産まれてきた。どうしてそのように産まれなければならなかつたのか、ぼくにはよく判らない。だけど、ぼくたちよりも後の世代は、過剰な屈託を持たずに育つことができたみたいで、それはなんだか羨ましいことに思える。

そのよく判らなさは、おそらく、滝本竜彦の同時代性とでも言うべきものにつながつてゐるのだろう。架空の敵との闘争を、所与の情念として与えられてしまつたぼくたちが彼の作品を愛する理由に。そして、別の誰かにとつては「内輪ノリの会話」にしか見えないという理由に。

けれども、小道具としての事実が「内輪」を規定したわけではないということは、指摘しておくべきかもしれない。

ぼくたちはコミュニティなんて単語を、唇を歪ませることなく口にすることなんてできなかつた。「内輪」なんて、むしろそこから逃げ出すべき場所だつたはずだ。

先に情念があり、それが事実を規定しただけだ。
これは言い訳ではない。

ぼくがロリータ画像を収集していたとか、童貞だとか、人間彼女がないとか、そういう眼を背けたくなるようなな

現実はまつたく関係がない。

本当だぜ。

ぼくは、ぼくたちの世代が不幸だつたと不満をたれているだけなのかもしれない。もうちょっと早く産まれていたら敵の不在を素直に喜んべたし、もうちょっと遅く産まれていたら屈託なんて知らずにすんだ、と。

だとしても、この牽強付会な世代論がいくばくの真実を語つてゐるならば、敵がいないのに闘争を求めるという背反の止揚を、ぼくは「敗北の総括」という負債」と呼ぶ。

だから、ぼくは負債を押しつけられてしまつた者である滝本竜彦を語る。それはおそらく、十字架を背負い、丘に続く長い長い道をよろまきながら歩く男のイコンに、どこか似てゐる。

ぼくたちの世代がかくあるものとしてあるのならば、イコンの裏には、女性の存在すらも疑いながら人間彼女を希求してしまう男の絵が描かれている。

滝本 僕はとりあえず中学生のころ『ノルウェイの森』を読んで下半身が興奮したことだけは覚えていま

す。

齊藤 あれは工口話だつたんだ！

佐藤 手コキシーンとかですか？ もう……ダメじゃん！

斎藤 いや、すばらしい（断言）。これはいい話です。

滝本 ていうか、奴ら（春樹氏の作中人物）はモテすぎですよ。僕は小説を書くと必ず「こんな男にこんなに簡単に女の子が寄つてくるハズない、都合よすぎ！」とか言われるのに春樹は絶対言われない。不公平ですよ。

斎藤 滝本さんには「ひきこもり」っていう前提があるから叩かれてしまうんですよ。いや、春樹も充分にひきこもり的なんだけど、作中人物には過去にいろいろあつたんだと匂わせていて……。

（小説現代一〇月増刊号『ファウスト』）

なぜ、『ノルウェイの森』はエロ話だったのか。それ以上ものになりえなかつたのか。話の筋を抜き書きすれば、

滝本竜彦が好んだエロゲーの筋とどれほど違うだろう。実際、ある種の少年少女にとつては、『ノルウェイの森』はボルノとして機能したのだから。

なぜ、滝本竜彦は村上春樹に対するルサンチマンを溜めこむことができたのか。どうして、フィクションの都合良さをわざわざ指摘し、指摘されなければならなかつたのか。

斎藤環の解釈は、一定の真実を語つてはいるだろう。

しかし、逆に語るほうが正しいかもしれない。村上春樹の作品は、現実を駆動する原動力になつてしまつたがゆえに、その都合良さを許容された。さらに言うなれば、消費されるべき欲望のあるべき姿として提供され、それがゆえに受容され、消費された。忘れるべきではない。あの小説が出版されたのはこの国の一九八七年だったのだから。あるいは、スターバックスで村上春樹を読むのをかっこいいと思っている、上海の小資のことを指摘しておこうか。

恐ろしいことに、そして、現実のモデルとして消費されたがゆえにリアルになつてしまつたのだ。それはたとえば、女のコにモテるために滝本竜彦の作品の主人公を真似る奴はいなくとも、村上春樹の作品の主人公を真似た奴は存在したという意味において。

というか、それはぼくだ。

失敗したけどね。

同時にこれは、ひとつめの問い合わせもある。『ノルウェイの森』が滝本竜彦にとつて、それ以上のものになりえなかつたのは、現実のモデルとして消費されたからだ。消費されつくしたそれが、彼にとつてリアルではなかつたからだ。ぼくたちが育つたのは、一九八七年の日本ではな

く、一〇〇一年の上海でもなかつた。

それは、女性の存在を疑い、恋愛の存在を疑つた滝本竜彦の哀しいまでの正しさだ。ぼくたちは、ぼくたちが直面した世界をマイナスサムゲームの世界だと認識した。

だから、だからこそ、ミニマックス戦略を取るのは有効な作戦だつた。最大損失を最小にする、頑張つて努力してふられておちこむくらいだつたら、初手から人間彼女なんていらないという作戦は正しかつた。

ならばなぜ、人間彼女を欲しがるのか、と、悪意は問いかける。この悪意に、ぼくは今一度、それとこれは、やはり、裏と表なのだと答えよう。

時代のせいさ。
時代のせいにしちまいなよ。

滝本竜彦はどこに漂着するのだろう。そして、どこに船出していくのだろう。この短い文章の、これは最後の問いだ。答えられることのない問いだ。

大塚英志のアジテーションに素直に反応するとしたら、ぼくたちの世代の誰かが、「父殺し、母殺しの物語」を書くべきなのかもしれない。

恥知らずにもぼくのこの被害妄想を、滝本竜彦に仮託す

るならば、けれども、それはいつたい、どんな物語であることができるのだろう。唯一、父であつた登場人物、『ネガティブハッピー・チーンソーエッヂ』の数学教師を弑するのだろうか。まさか、もちろん、そんなに単純な解決であるはずはない。世界のありようを誰も彼もにつきつけ、あの敗北の、この敗北の総括を行うことがそんなに簡単であるはずはない。

ひとつだけ、ぼくにも判ることがある。

敵であれ、人間彼女であれ、信じられないものを求めてしまうぼくたちの矛盾を救つてくれるのは、滝本竜彦にとつてはおそらく姉だ。『ネガティブハッピー・チーンソーエッヂ』における下宿のお姉さんであり、『超人計画』において「あんた見てると心配で心配で」などと言つて、たまに泣きそうな表情を見せる』お姉さんだ。

あの滝本竜彦が、周到に理由を用意することなしに、主人公と会話をさせる姉は、彼にとつて、おそらく革命爆弾の起爆装置であるのだろう。

だから、彼がそこに眼を向けるまで、もうすこしの間、ぼくたちは待つべきなのかもしれない。握りしめた革命爆弾が掌からすべりおちていかないように祈りながら。

滝本竜彦作品紹介

もゆ

『ZEWによひのいせー』

1991年1月31日初版発行 (ISBN4-04-873339-7)

『ネガティブハッピー・チューインソーホッヂ』

1990年11月1日初版発行 (ISBN4-04-873338-9)

描かれたのは、サーカスのライオン遣いよろしく敵を引きつれ登場する少女。少女の傍に寄りそつとくことを願つた少年。かくあれかしと状態を願つた少女と少年の物語はやがて、恋愛に回収されていく。

よろしい、これは物語だ。

既に語られた物語だ。繰り返された物語だ。

だが、しかし、幾重もの逆接のなか、くいしばつた歯の隙間から漏れる吐息が聞こえるか。状態を、ただそれだけを願つた者たちは、願つたその瞬間に、敗北の運命にからめとられていく。物語が物語として終わるために、勝利と恋愛なんていう、それらしい結末が用意されたとしても、ボクたちはもう騙されることすらできない。

滝本竜彦は物語をものした。

乞い願い、たどりつくことができないと知りながら、一縷の希望から離れられないでいるボクたちの物語を。これは、だから、革命の序章だ。

かくあれと望んだ状態を手にするために、男は世界を牛耳る悪の組織と対峙する。ここにはもう、それらしい結末すら不要だ。幻の革命爆弾を握りしめ、今度こそ正しく男は敗北していく。世界は変わらず、男もまた変わることなく、物語は終わる。

敗北主義だと嗤う者は去れ。

正しく敗北できなかつたニッポンの革命文学において、滝本竜彦ほど軽やかに敗北してみせた者があつたろうか。もつてこれを、ボクたちが夢見た革命の総括であると言うにしくはない。

かつての少年は、男は、そうして敗れた。

少女は、では、どこにたどりついたのか。

またしても、少女は恋愛のなかに回収されていくことを望んだ。男は少女を抱きしめ、けれども少女を受けいれなかつた。世界の涯て、すべての絶望を背負い、男は革命に殉じた。少女の絶望は救済され、少女は世界に漂着する。

男の傍にはもはや少女の居場所すら失われた。革命が決して起こらない世界に、男はひとり取り残された。それでまた、男は起ち、走り始めるのだ。今まで、もう一度。

『超人計画』

—1003年7月31日初版発行 (ISBN4-04-873481-4)

革命三部作は、自身との闘争を斗う男の物語によって結ばれる。世界を変えることができなかつた男は、ならば世界の対である自己を変革せんと試みた。男はそれを「人間彼女を作る」という目標に結実させしめた。間違えるな。男が女といぢやいぢやしたいなどと望んだわけがない。少女の愛を拒否した男が、どうしてそんなことを望むだろう。

けれども、悪意を剥き出しにした無知なる世界は、ついに恐るべき刺客を男のもとに送りこんだ。かつての少女は成長し、女となつて男の前に現れた。ボイルドエッグズのウェブサイトに公開されている幻の第十話に、その様子が描かれている。

女は言う。「そうね、あたしも、つきあうということはどういうことなのか、よく意味がわからないと考えることあるわ」それはまつたく、男が大学時代、あの六畳間で女にささやかれた科白のデッドコピーだつた。

このとき、男は言うべきだつた。望んだものは状態なのだと、偶然ぶつかった少女が落とした学生証を拾つて恋が始まると瞬間のその状態なのだと言うべきだつた。

その言葉を、ボクたちはまだ幾分の間、待つことになる。

『超人計画』出版記念トークセッション 「超人を語ろう」

—1003年9月11日 (ジュンク堂書店池袋本店四階)

望んだものが状態だったのならば、男が永劫回帰に辿りついたことはむしろ必然だつた。永劫回帰とは、永続革命の別名だつた。けれどもついに、男は言い放つた。それは望んだものではないと、きつぱりと告げた。ボクたちは、伝説の樹のしたで選択肢を選びつづけなければならぬと告げた。

よろしい、ならば革命だ。今一度、今一度の革命だ。

世界に敗北し、自身を超克できなかつたボクたちの、世界革命戦争宣言はここに発せられたのだ。

「アスキーさん」 大槻ケンヂ×滝本竜彦対談

『週刊アスキー』(1003年10月18日号)

ファンの子に告白されるという経験はないのか、と問う大槻に、男は「なくはないんですけど、やつぱり考えてしまつて……」と応える。三点リーダー二文字ぶんの沈黙に耐えきれず、大槻は話題を変える。

この沈黙に隠されていたものがすべてだつた。それこそが、それだけが革命の意志だつた。大槻にはそれを愛してほしかつたと思う。状態を望みつづけたボクたちの絶望を。